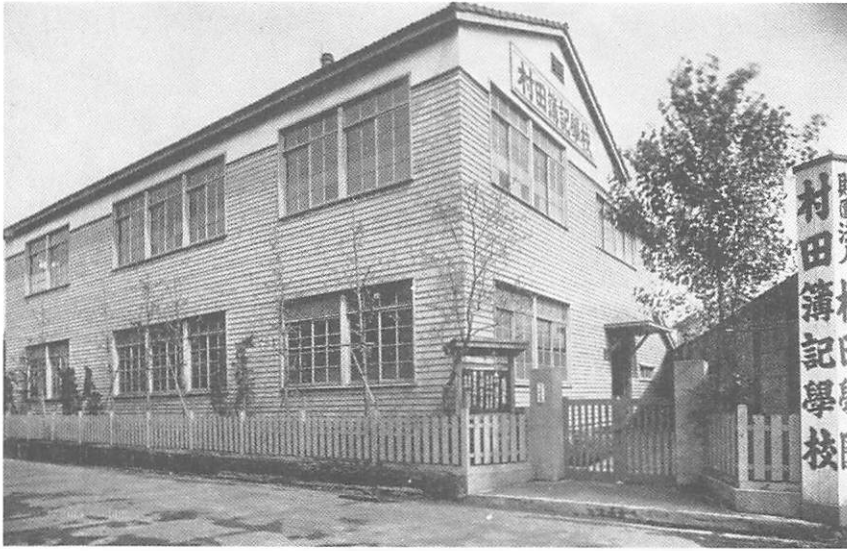


飛躍・充実期（一九四五―一九七五）

敗戦―灰塵の中から



昭和22年1月千代田区神田神保町の
2の14番地に建てられた校舎

新学制下での出発

執念の簿記学校校舎再建

災厄のたびにそれを乗り越え、大きく発展に発展を重ねてきた学園。しかし、昭和二十年の東京大空襲はまたもや一物もとどめず壊滅させてしまった。

そして、街には浮浪児や失業者があふれた。海外からの引揚げ者は陸続と続き、これらの人々が職を得て口を糊するには職業技術教育を受けるしかなく、そのための各種学校が雨後の筍のように生まれようとしていた。

焦土に立ち尽くしていた村田謙造は、これら職業教育を求める人々の群れを目のあたりにし、自らの使命を痛感した。こうして決然奮起し、西片町にあった自宅を売却、これによって資金を得て校舎の建築に当たったのだった。

のちに村田謙造は教員に対し「今までたくさんの困難にあった。たとえば校舎が火災にあった時など、計算を立ててみてからは恐ろしくて再建など着手できなかったと思う。ただ、学校を再建したいという一念だけでやってきたのだ」と語っている。

計算の上になって実行することが大切なことは村田謙造自身が生

涯説いてきたこと。しかし、進退極まった村田謙造を突き動かしたのはやはりあくことなき教育への情熱だった。

昭和二十年代後半の簿記学校の事情

昭和二十九年に奉職したある教員は、当時の村田簿記学校の様子を次のように語っている。

ちょうど旧万崎百貨店の三、四階を借り受け、新たに五教室を設けて、本科がまさに拡充期に入ろうとする時期だった。当時の校舎は木造二階建ての上下六教室であり、その他寿々木屋そば店隣りに木造二教室といった設備であり、村田校長以下の総務部は本校舎向かい角の建物で執務されていた。当時、第一回の受け持ちは本科四組ということであったが、最初の一年は教室にマイクの設備もなく、また交差点の直前であったため、停留所を発進する都電の轟音と競争で、教壇での授業など思うにまかせず、教室の中央に進んでありつたけの声で怒鳴るという授業風景だった。

村田女子商業高等学校の誕生

村田簿記学校がようやくの思いで二十二年一月に校舎を復旧して授業を再開した後、村田女子商業学校の校舎再建が進められる。二十三年三月、村田女子商業学校に木造平屋建ての校舎が完成し、なんとか授業再開にこぎつけることができた。

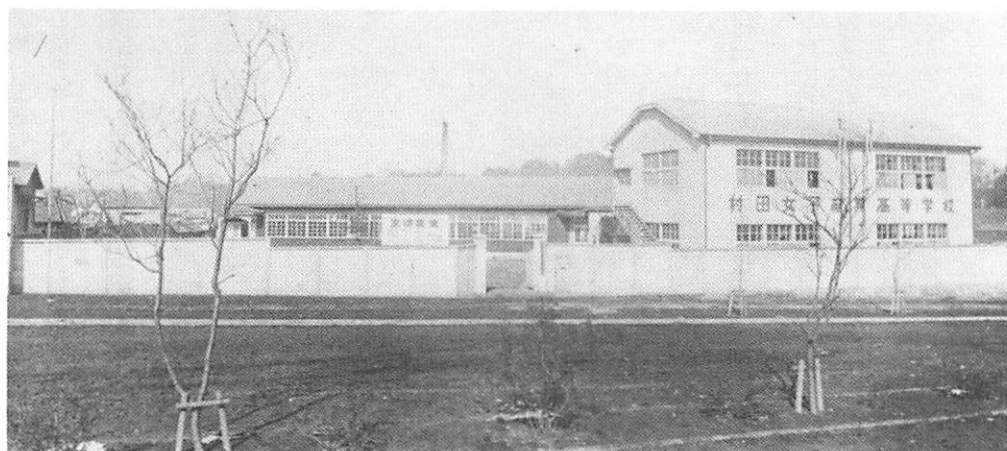
また同月には、学制改革により、村田女子商業学校を「学校法人村田学園高等学校」と改称。同二十六年から校名を「村田女子商業

高等学校」と改めて高等学校としての第一期生を迎え入れた。こうして、自活のために手に職をつけようという女子の向学心に応え、村田女子商業高等学校では二十七年から三十年にかけて新入生を迎えるたびに校舎を建て増しし、遅ればせながら教育体制を建て直していった。

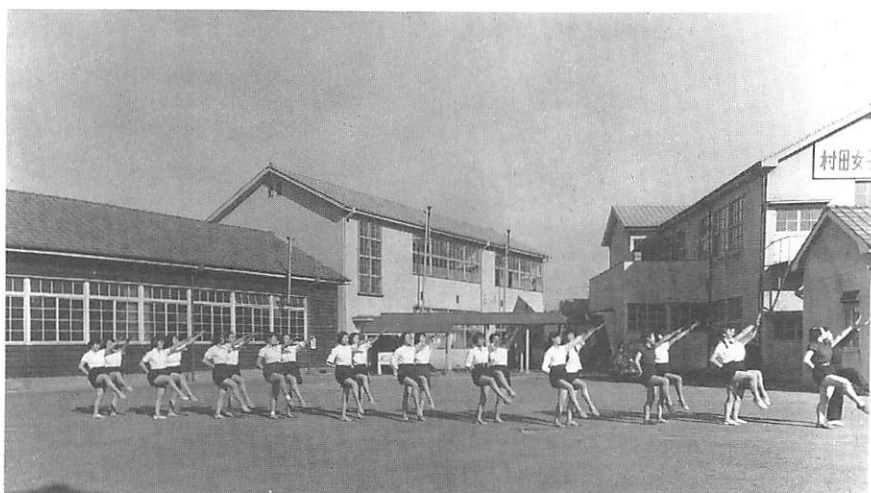
当時、どんな教育が行われていたのか。昭和三十一年六月に村田謙造が企業に宛てた書面には次のような一節が見える。

平素当校卒業生の就職に関しては一方ならぬ御厚情を賜り厚く御礼申し上げます。さて、当校は昭和六年村田簿記学校の姉妹校として創立、実務に役立ち道義を重んずる、教養の高い女性の育成を一貫した教育方針として、商業経理課程、特に簿記、珠算、タイプライターの実務科目を独自の教育により修得せしめておりますので、毎年業界の各方面に多数御採用の榮に浴しております。(以下略)

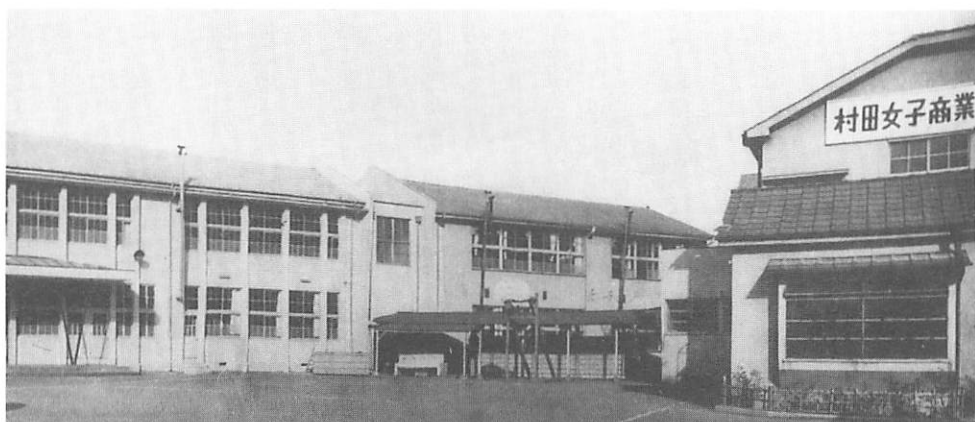
なお、昭和二十八年度の女子商業高等学校の入学案内を見ると、考査料五〇〇円、入学金一、〇〇〇円、授業料一、〇〇〇円とある。当時、村田女子商業高等学校の卒業生の初任給は五、一六、〇〇〇円が相場だった。



「村田女子商業高等学校」(昭和28年)



校庭で村田女子商業高等学校生徒達 (昭和28年)



「村田女子商業高等学校」2階建て校舎増築(昭和31年)



藍綬褒章を受文章

生涯忘れられぬ日

村田謙造が村田学園の経営のみならず珠算・簿記教育の普及に献身、さらには私学教育の振興に全身を捧げてきたことは諸賢の認めるところだった。こうした功績が認められ、昭和十五年には教育勅語頒布五十年にあたって、文部大臣から表彰を受けたのをはじめ、同二十年には実業教育振興中央会長より表彰を受け、また、同二十五年に、私立学校法制定祝賀式典において、永年勤続者として表彰を受けた。

村田謙造にとって生涯忘れられぬものとなったのが、昭和二十五年五月の藍綬褒章受章だった。

「褒章の記」には次のように村田謙造の業績が簡潔に記されてあった。

早くから教育に専念し 明治四十二年経理簿記教育のため私塾を創立後村田簿記学校と改称して引続きその経営発展に当り又村田女子計理学校を興して女子の職業教育に新生面をひらきその他珠算簿記の権威として実業教育の振興に貢献するところ少くなくまことに公衆の利益を興し成績著明である よつて褒賞条例により藍綬褒章を賜わつてその善行を表彰せられた

確立する教育体制

簿記教育界のリーダーとして

二年制コースも登場

簿記学校の教育体制も整いかけた昭和二十七年、一年制本科が設けられた。それまでは速成科、専攻科、珠算専修科などの短期コースで教育が行われていた。速成科の修業年限は昼間部が三か月、夜間部が四か月、専攻科は昼夜間部とも三か月、珠算専修科（夜間部）は三か月だった。

三十年代には本科に二年制のコースが設けられるが、本科のメインは一年制で、十数クラスのうち二年制は一クラス程度に過ぎなかった。

授業科目と週の授業時数は次のとおり。

本科	
銀行簿記	三
英文簿記	二
会計及監査	二
税務会計	二
修養講座及書道	三
会社銀行簿記	二
原価計算	三
珠算	三
実習	四

速成科		(昼間部)		(夜間部)	
商業簿記	四			三・五	
会社簿記	二			二	
工業簿記	一			一	
珠算	二			二	
修養講座及書道	二				
専攻科（選択科目）					
原価計算	四	会社工業会計	三		
銀行簿記	三	英文簿記	三		
青色帳簿	一	税務会計	一・五		
会计学	三	会計監査	一・五		
修養講座及書道	二				
珠算専修科					
珠算及暗算	五	商業計算	三・五		
修養講座及書道	二				

昭和二十七年度の学則によると、入学金は五〇〇円、授業料（月額）は本科が一、〇〇〇円、速成科の昼間部が八〇〇円、夜間部が六〇〇円、専攻科の昼間部が八五〇円、夜間部が七五〇円。珠算専攻科は二五〇円、入学金は五〇〇円、試験料は一科目につき一〇〇円となっている。

卓越した教育方法

当時の入学案内には本科の目的として次のことが掲げられている。

簿記は一般には難解なりとして敬遠される。之は実に教え方習い方の拙劣なためであつて本校の如き永い伝統に輝く独得の巧みな指導法で学べば何人も容易に理解し而も終生忘れることはない。

簿記の基本原理解から記帳—決算迄詳しく教授し併せて珠算も初歩から平易懇切に教え個人会計から会社工場等の計理を担当出来るように指導する。

また、珠算専修科の目的も案内されているが、当時の事情をほうふつとさせる。

近頃珠算の隆盛に伴い、所謂ソロバン塾が多数存在するが、これ等は主として小・中学生を対象としたもので、最も必要にせまられている一般社会人に対しては、その門戸は開放されていない実状である。如何に必要に迫られてはいるものの少年少女の中に混つてソロバン塾で珠算を習うという事は何か気分的にも割り切れないものがあるばかりでなく、仲々勇気が伴わねばならぬ事であるが、実際に於てはこの種の勇気の所有者は案外少数である。

本校ではこの不便さと不満とを除去するために一般社会人、及び卒業期を控えて就職希望或は就職決定の大学生を対象とし

た夜間二ヶ月修了の普通科及び同高等科を設置して気易く日常ソロバンを扱い得る多数の社会人を養成して居る。

村田簿記学校のカリキュラム・コースは時代のニーズに合わせて改訂されてきた。昭和三十四年度には速成科修了後のコースとして青色申告科、会社会計科、原価計算科、会計学科が、各種の受験科としては日商三級受験科、同二級受験科、同一級受験科、税理士受験簿記科、同税法科などが、また税法一般科、所得税法科、法人税法科などの多彩な科が開設されている。

経理学校の発展と主幹校協会の

全国経理学校協会初代会長に

戦後の混乱期からいち早く立ち直った各種学校は、日本経済の中樞に多種多様な人材を輩出して我が国の発展に大きく貢献する。各種学校の社会的地位を向上しようという運動が期せずして起こり、特に経理・簿記学校においてはそのための運動体となる協会設立の機運が高まっていた。

昭和三十一年三月十九日、日本商工会議所に全国から参集した経理・簿記学校関係者の顔がそろった。全国経理学校協会の発起人会および設立総会がまさに開かれようとしていた。

全国経理学校協会の発起人会は、満場一致で創立総会に切り替えられ、会則により役員が選出された。初代会長は村田謙造。事務局を村田簿記学校におくこととなる。総会が終了し、村田謙造は「め

でたく総会を終わりましたが更に錦上花をそえたく、我が学会、政界に名も高き、学識、人格ともに申し分のない高瀬莊太郎博士を名誉会長に推戴いたしたくご賛同を得たいと思います」として、満場の可決を得、高瀬博士を名誉会長に推戴した。



全国経理学校協会より贈られたブロンズ（昭和36年）

軌道に乗る協会の事業

『全経五年史』では協会設立前後の状況を次のように記している。

前日より準備のため上京した近畿の和田先生、小野山先生と筆者（羽根喜郎）は村田学園に集まり、山田惣一郎先生とともに貼紙や名札等を作成した。

当日は、朝早くから会場にゆき、準備をしたが、人手不足で受付、会費徴収その他雑用は東京簿記学校職員の手で行なわれた。出席者は朝早く九時より高山先生一行が到着され、山田先生は駅頭に迎えて握手、会議所のロビーで来賓として参列された牛窪愛之進氏と休憩談話してられるのを見て、まず安堵し、そのうちに東北からは野口一郎先生はじめ近畿、中部の諸先生の出席があり、指定席に着席、開幕された。

翌日は箱根湯本天成園に一同宿泊、懇親会を開催した。これは村田会長の招待だった。

全国経理学校協会は当初から活発な運動を展開し、とりわけ検定に関しては、昭和三十一年の十月に第一回簿記検定を実施、現在では簿記、珠算、秘書、文書処理、情報処理などの各種検定を実施して、経理・ビジネス教育の振興に大いに貢献している。

現在、事務局は東京都豊島区大塚の全経会館にある。

北海道の地に簿記学校

昭和三十年、北海道の開発行政の一部局として北海道開発庁が設置された。この時代は朝鮮戦争を契機に日本経済が深刻な不況から立ち直ろうとしていた時期であり、北海道においては第一期総合開発計画が着手されようとしていた。

村田謙造が「北海道簿記専修学校」の指導を快諾したのも、この北海道に、明治四十年代の日本の縮図を見たからに違いない。同校は、北海道編物専門学校校長の協力要請によって、昭和三十年四月八日、校舎を札幌市北一条西九丁目において、村田謙造を校長に迎え、道民の期待のうちにスタートした。

北海道簿記専修学校の教育はそば屋「花月」の二階で始められた。本科（現経理科）一学級（昼間部）、隔月募集の速成科（昼・夜間部）各一学級で、三〇坪ほどの二階に教室を一つと事務室をしつらえて旗揚げされた。一期生は三六名に過ぎなかったが、このなかからは、専門会計人としての税理士をはじめ、大小の企業で活躍した有為の人材が多数輩出された。

同校は、昭和三十二年一月に、札幌商工会議所にその経営を引継がれ、「北海道簿記学校」となり、昭和六十一年には「札幌商工会議所付属専門学校」と改称、北海道における簿記教育機関として重要な地位を占めている。

村田謙造が、「北海道簿記学校」を退任したのは、昭和三十五年十一月二十四日のこと、当時の北海道新聞の記事には、次のように記載されている。

村田北海道簿記学校校長退任

札幌商工会議所が経営している

北海道簿記学校の村田謙造校長（東京都村田簿記学校校長兼任）が二十四日退任、広瀬札幌商工会議所会頭が校長を兼務することになった。

なお、村田氏には町村知事と広瀬会頭から感謝状が贈られる。



北海道簿記専修学校

飛躍のバネ、五十周年



昭和31年4月に
取得の校舎
(神保町1-11)

簿記教育の殿堂建設に向け

五階建ての校舎を購入

敗戦の焼け跡から立ち直ったとはいうものの、村田簿記学校の校舎は神保町周辺に点在し、不便なことも多かった。そこで、村田謙造は昭和三十四年の創立五十周年を前にひそかに校舎の拡充を決心したのだった。

その第一弾として、昭和三十一年に神田神保町一の一一にあった万崎ビルを取得し校舎を拡張する。この校舎は地下一階地上五階、鉄筋コンクリート造りで耐震耐火構造の校舎からは東南に皇居の松の緑が望め、官庁街の方塔、円塔、尖塔も指呼の内。山手から下町一帯にかけての眺望をも一望の中に収めることができた。

村田謙造教壇生活四十八年を祝う会

村田謙造は簿記教育界の大御所として早くから君臨し、学内外で村田謙造の薫陶を受けたものは少なくなかった。山田惣一郎、藤間哲夫両氏も村田謙造を生涯の師と仰ぐもので、両氏の発起により、「村田謙造先生教壇生活四十八年を祝う会」が、昭和三十二年十一月九日、中野の日本閣で盛大に行われた。



「教壇生活48年を祝う会」のメンバーに囲まれる村田謙造

当日の出席者は次のメンバーだった。

加藤 行吉	高島喜代治	相原於菟三
松阪 計一	池畠 康夫	小林良太郎
佐々 佐	島田 定吉	石井玉三郎
藤原与四郎	佐生 斉知	菊池 峻二
木村 留吉	鈴木 正彦	浅原 定文
野村 正男	吉野 喬	山田惣一郎
宮下 秀夫	藤間 哲夫	浅津 幸一
芹沢 次助	松田栄太郎	胡沢 哲郎
神戸 与平		

このように明治、大正、昭和初期にわたる村田学園の大先輩方が集まって、大いに祝杯をあげ、懐古談に華を咲かせたものだった。

学園関係者から寿像

昭和三十四年十月十六日、村田女子商業高等学校において、同校の教職員、在校生と村田簿記学校の教職員、生徒が多数参列するなか、村田謙造校長の寿像の除幕式が挙行された。

修祓、祝詞奉上に続いて、村田謙造校長の令孫修一君（六歳）の手により、寿像が除幕された。玉串奉奠の後、加藤行吉校友会長から制作者の紹介があり、校長へ花束が贈呈された。最後に校長が謝辞を述べ、万歳三唱をして盛況のうちに閉会した。

また、除幕式の後、村田簿記学校校友会長から贈られた村田簿記学校校旗の贈呈式が、村田女子商業高等学校で行われた。校旗は最高級の綾錦の生地に、金糸銀糸で校章を浮かし、豪華なフレンジの金糸をあしらったもので、以後、村田簿記学校の象徴として関係者

に仰がれることになる。

なお、寿像の「頌」には次のように記されている。

頌

村田謙造先生は学校法人村田学園の創立者であって、同学園が今日の隆盛を見るに至りたるは先生の実力によるところ深大である。

茲に創立五十周年記念式典の挙行せられるに当り、我等一同この像を贈呈し、敬仰の念を止めんとするものである。

昭和三十四年十一月十日

学校法人 村田学園

村田 簿記学校

村田女子商業高等学校

教職員生徒同窓会一同



ある決意

寿像の除幕式も終え、五十周年のムードが急速に盛り上がってきた十一月十日、創立五十周年記念式典が共立講堂において、盛大に挙行された。

来賓として臨席をたまわったのは次の歴々だった(主な来賓)。

松田竹千代 文部大臣(代理)

東 竜太郎 都知事(代理)

安井誠一郎 前東京都知事

足立 正 日本商工会議所会頭(代理)

高瀬莊太郎 産業教育振興中央会会長(代理)

小野 光洋 東京私立中高協会常任委員長

高木 三郎 私学振興会常任理事

市村駒之助 千代田区長(代理)

このほか、岸信介内閣総理大臣を初めとする多数の要人から心のこもった祝電が寄せられた。

式典に臨んでいた村田謙造は、秘かにあることを決意する。

当時のことを後に村田謙造は「簿記会計の知識・技能は国民常識としてあまねくこれを普及しなければならぬ。そのための殿堂を、私の命のあるうちに建立したいと念願しました。それは、学園創立五十周年の時のことです」と回顧している。五十周年の折に、ふと頭をもたげた簿記教育の殿堂建設のプラン。それは、四年後の昭和三十八年の秋に、その実現をみたのであった。



創立50周年式典での「びよびよ大学」公開録音

歌舞音曲で祝った五十周年

創立五十周年記念式典が厳かにとり行われた後、引き続いてアトラクションに移った。

アトラクションのトップを切って、女子商業高等学校の生徒による合唱とダンスが行われ、次にコロンビアトップ・ライトによる漫才、アンドレ・レジヤンによるシャンソン、伊藤素道とリリオ・リズム・エアーズによるジャズボーカル、早川真平とオルケスタ・ティピカ東京によるタンゴなど魅力いっぱいプログラムが続いた。

呼び物はラジオ東京（現TBS）「びよびよ大学」の公開録音で、四〇〇回を記念して村田学園創立五十周年記念式典の会場に出張教授に來たものだった。この番組は当時の長寿番組として知られ、千葉信男おんどり博士の軽妙な進行で評判をとった。

五十周年記念全国珠算競技大会

記念式典に先立つ九月十三日「全国珠算競技大会」が専修大学において行われた。東京都、日本商工会議所、財団法人産業教育振興中央会、財団法人全国商業高等学校協会、社団法人全国経理学校協会、読売新聞社、日本経済新聞社の後援を得、全国から六八一名が参加して挙行された。

全国珠算競技大会の入賞者（一等）は次のとおり。

一般の部

団体総合競技 東京珠算選手会

個人総合競技 大沢 敏彦

読上暗算競技 谷内 行夫

読上算競技 谷内 行夫

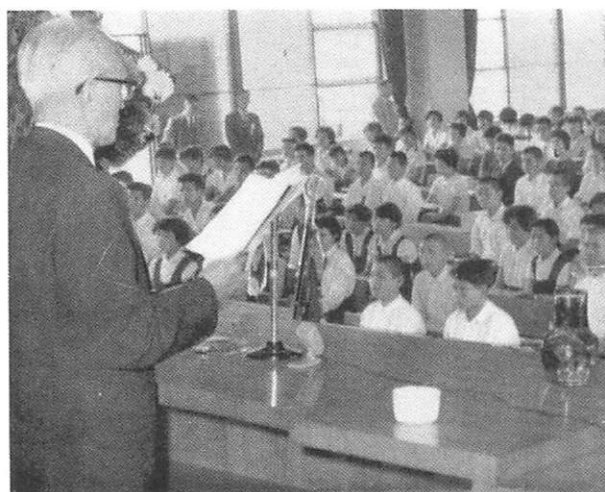
高校の部

団体総合競技 宇都宮商業高等学校

個人総合競技 渡辺 周司



創立50周年を記念して開催した全国珠算競技大会会場で挨拶する村田謙造



読上暗算競技	佐野 利光
読上算競技	田中 光子
中学の部	
団体総合競技	荒川第五中学校
個人総合競技	斎藤 喜彦
読上暗算競技	吉田 勝美
読上算競技	鈴木登志子



校舎拡張のため鉄筋5階建校舎新築 神保町2-14(昭和38年3月)

校舎の拡充進む

簿記学校の新館落成

就学希望者の増加に伴い、校舎も手狭になってきたので、神田神保町二―一四に、総工費一億五千万円を投じ、地下一階、地上五階鉄筋コンクリートの新校舎が建設された。昭和三十七年三月に着工、翌三十八年三月に完成した。

この新校舎の屋上に設置されたネオン塔の「村田簿記」の光芒は東京の夜空にくっきりと浮かんで、学園の洋々たる前途を象徴しているかのようであった。

女子商業高等学校の新校舎落成

村田学園五十周年の感激さめやらぬまま、引き続き村田女子商業高等学校の創立三十周年を迎えるに至る。

この記念事業の一環として、昭和三十五年五月三十日から新校舎建築第一期工事が着手された。第一期の四階建て鉄筋校舎は翌三十六年一月三十日に完成し、同年四月十四日には第二期工事が始まる。こうして十月五日に全工事が完了し、茗荷谷ホールにおいて落成式挙行の運びとなった。

村田謙造の多年の念願であったこの新校舎落成を契機として、発展の基礎いよいよ固きを加えたばかりでなく、学園は飛躍的繁栄時代に入ったのである。



昭和36年1月完成の村田女子商業高等学校新校舎

女子商業高等学校体育館の竣工成る

簿記学校の新校舎落成に続き、村田女子商業高等学校の体育館建設が開始されたのは、昭和三十八年八月三十一日であった。以来半年有余を経た翌三十九年三月十二日、三階鉄筋の体育館が落成した。時あたかもスポーツの祭典東京オリンピック開催の年でもあり、待望の体育館竣工がここに成ったことは、まことに意義深く、感激またひとしおのものがあつた。

施設概要は左記の通りである。

一階

調理室 作法室 教官室 宿直室 体育器具室 更衣室
シャワー室 部室 用務員室 手洗所

二階

体育館兼講堂Ⅱバスケットボール・バレーボール・バドミントン用の正規設備があり、二種目同時に練習することもできる

ステージⅡ四八・四平方メートル 二つの控室とともに講堂を兼ね、千名分の椅子が常備してあつて、あらゆる集会に利用できる

三階

ギャラリーⅡ椅子を使用しても百数十名の収容が可能である



昭和39年3月完成した村田女子商業高等学校体育館



昭和40年7月完成した北軽井沢高原寮

北軽井沢に高原寮完成

翌昭和四十年七月十五日、群馬県北軽井沢に高原寮が完成した。五月十九日に着工して以来、二か月足らずで完成したのである。新寮は生徒居室（一階）生徒寝室（二階）計八二畳、ホール兼食堂、浴室、調理室、手洗、職員室の設備となっている。



校内簿記競技大会で表彰を行う神戸与平校友会会長(昭和43年11月)

培われる不動の実績

十八歳で税理士試験合格者も

昭和三十三年十二月十二日、第八回税理士試験合格者の発表があった。村田簿記学校の卒業生や在校生が多数並ぶなか、南川立子の名前がひとときわ輝いていた。南川立子は村田の卒業生で当年十八歳の初の「未成年税理士誕生」の瞬間だった。

南川立子は村田簿記学校に一年間通学し、日商簿記上級に合格、税理士試験の受験資格を得ていた。このニュースは方々で話題を呼び、帝国地方行政学会の『税吏』でも詳しく紹介された。

真面目で粘り強い村田生

南川立子を初めとして村田生が各種の競技大会で高い実績を上げてきた裏にはもちろん卓越した教授方法が上げられるが、地道に物事に取り組む伝統も見逃すことができない。

昭和三十五年度の卒業式における学事報告によると、本科入学者一、一五〇名（うち中学卒二五〇名、高校卒以上五五〇名、夜間部三五〇名）に対し、卒業生総数は七五三名（うち中学卒二〇二名、高校卒以上三八七名、夜間部一六四名）。

卒業生のうち優秀賞受賞者が三十五名、努力賞受賞者が二十一名、皆勤賞受賞者が一一一名、また精勤賞受賞者は九十九名いた。実に卒業生の三割近くが精勤賞が皆勤賞を受賞していたことになる。

勇名を馳せる女子商業高等学校珠算部

高校珠算界の覇者として知られる村田女子商業高等学校の珠算部は、これまでに数々の金字塔を打ち立て名声を不朽のものにしている。

珠算部はそれまでも東京では上位入賞の常連だったが、珠算界最高峰といわれる国民珠算大会には東京代表として乗り込んでも壁の厚さに何度も涙していた。昭和三十八年の国民珠算大会では精鋭メンバーが見事その壁を突破し、各地から選ばれた大学を含む六〇余校、数百名のなかで健闘し三等入賞を果たしたのだった。

翌三十九年の東京都珠算大会兼国民珠算大会東京予選（主催Ⅱ東京商工会議所）でも偉業を達成する。同大会は一部（一般）と二部（学校）に分かれ、二部には大学も含まれていた。高校で優勝するとは至難の技とされ、この年も下馬評では日本大学の連続優勝は確実視されていた。ところが発表では、一位が村田女子商業高等学校。しかも二二〇点という大会タイ記録での優勝だった。

珠算オリンピックで銅メダル

ところで三十八年以来、珠算部の選手の中にあつて、数々のタイトルを一人占めに行っている選手がいた。人見英子その人で、一年生にして国民珠算大会に出場、二年生になると全国珠算選手権大会（主催Ⅱ全国珠算学校連盟）の見取算で選手権を獲得、全国高校珠算大会の個人の部で満点優勝を遂げるなど、向かうところ敵なしだった。こうして波に乗る人見英子は昭和三十九年、珠算のオリンピックともいえる第四回国際珠算競技大会に日本代表として出場する。第一回大会は昭和三十五年に東京で開かれ、日本チームが団体優勝し

ていたものの以後は優勝から見放されていた。九月三十日、東商ビル国際会議場には色とりどりの国旗が掲揚され、国際大会のムードをいやが上にも盛りあげていた。

日本チームは強化合宿を積むなど背水の陣で臨んだ結果、優勝杯を奪還。雨池健二（大阪東商業高等学校）、村上タミ子（三井信託銀行広島支店）、小林一雄（関西学院大学）の三名が見事満点賞を獲得したのを初め、個人総合でも雨池健二が韓国の朴を抑えて優勝した。人見英子は乗算から順調に進んだが最後の伝票算でつまずき、惜しくも総合入賞は逸したものの、種目別競技では乗算で四位に入賞、除算では三位に入賞し銅メダルを獲得した。

他のクラブも健在

このほか文化系では、全東京タイプライティング競技大会で完全優勝の記録を伸ばし続けているタイプライティング部も忘れてはならない存在である。また、全国高校総合体育大会（インターハイ）、全国高校女子ソフトボール選手権大会に出場した経験を持つソフトボール部、インターハイに代表を送った剣道部など、体育系のクラブも負けじと活躍している。

幅広い人間性を培う課外活動

簿記学校恒例の校外授業

村田簿記学校では伝統的に課外活動に力を入れており、バラエティーに富む企画が実行されてきた。

村田謙造が、簿記のほか剣道や書でも一家言を持っていたことは



村田簿記学校の校外授業、川口湖にて
(昭和44年11月)

つとに有名で、自らの経験からこれらの課外活動を通して、いわば「文武両道」を実現し、幅広い人間性を涵養しようとしたにはほかならない。

昭和四十四年の例を見ても、川口湖や赤城山、日本平、相模湖、奥多摩湖へ校外授業に出かける組があるかと思えば、伊豆を一周したり蓼科、白樺湖へ、あるいは裏磐梯や松島海岸へと遠出する組があったり、活発な校外授業には目を見張るばかりである。

忙しい授業や検定を縫っての校外授業であり、企画・運営の苦労は想像するにあまりあるが、それだけに得たものも大きかったに違いない。

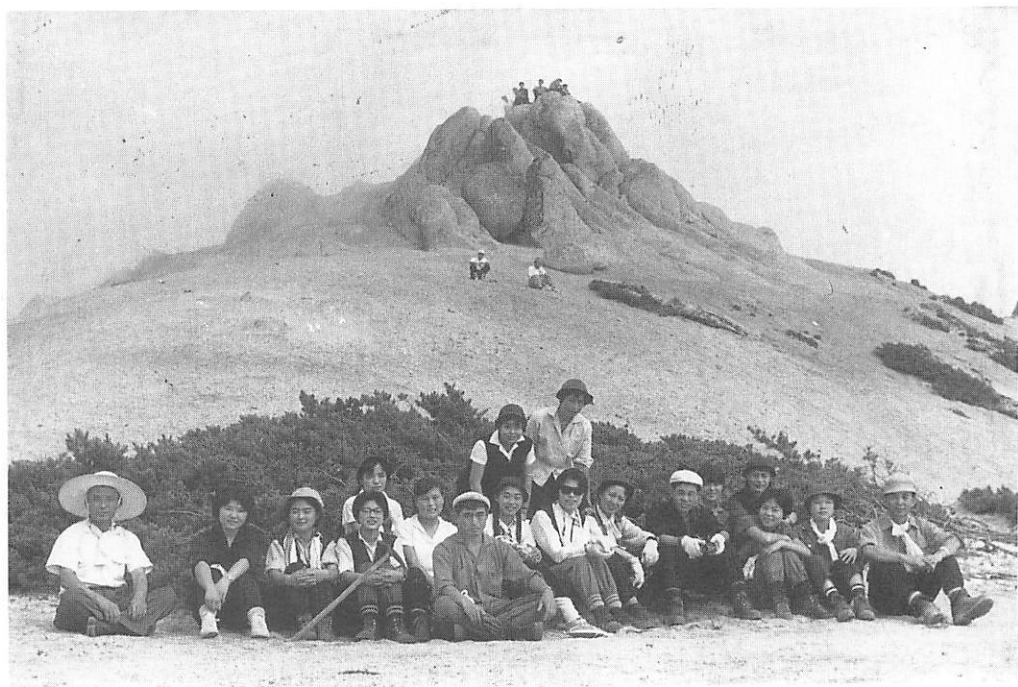
四季を通じた課外活動

一方、村田女子商業高等学校では昭和三十年代後半からの施設・設備の拡充と比例して課外活動が活発化し、学園生活に一層の彩りをそえるようになる。

この当時から、青葉薫る初夏に催される体育祭、生徒全員が参加してクラス優勝を競う球技大会、本校生の本領を遺憾なく発揮する珠算・タイプ大会などが目白押しだった。

このほか毎年夏になると、北軽井沢で生徒自身の手による四泊五日の集いが実施され、さらに北アルプス方面の夏登山も恒例行事のひとつになっていた。冬になると、信越方面でスキー教室が開設され、生徒たちは思い思いのシニールを描き、また、校外行事としては修学旅行が忘れられない学園生活の思い出を綴ってくれる。

女学校時代から山に憑かれ、教職員の間でも健脚で知られた村田照子は、『山たび』によせて、次のような随想を残している。



北アルプス燕岳にて（昭和34年8月）

（以下抜粋）

山のこと

村田 照子

私が山のよさを知ったのは女学校一年の初夏の頃、一泊の山旅を学校の山岳部の人達と奥多摩に過ごした時でした。その日は終日霧雨が降って皆油紙を頭からかぶって視野のきかない山道をただ黙々と登り、降りてきただけでしたけれど、それがかえって私には山の靈気にすっかり酔わされたみたいで、それからの五年間、夏になると登山病患者になっていつもいつも山岳部の一員に加えてもらいました。

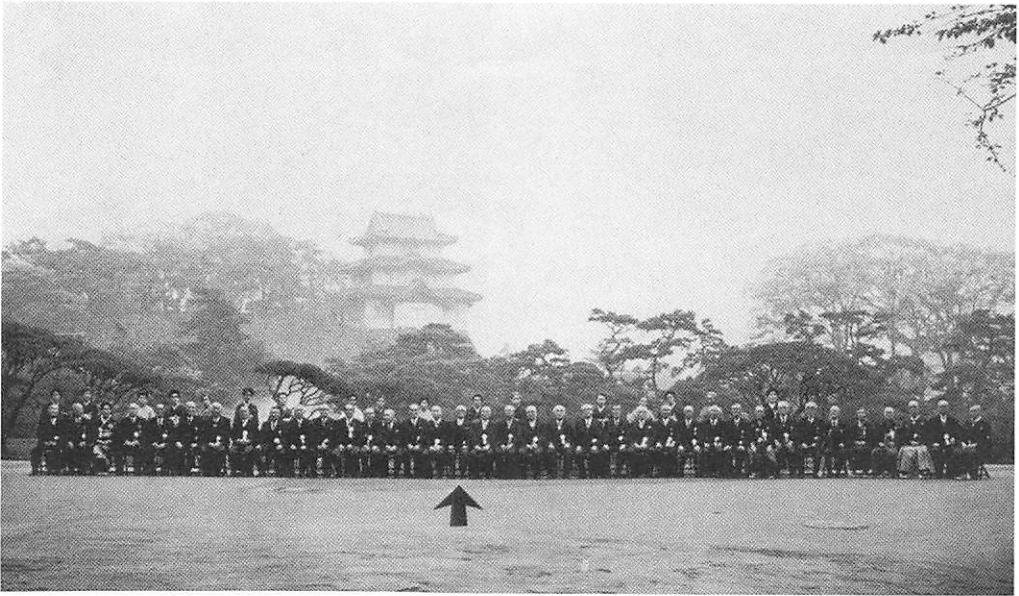
私達の山岳部には先輩の方々から、誰いうともなく伝えられてきた、山の合言葉がありました。

「登りは登りを楽しみ、下りは下りを楽しむ」

「黙々と行く時、山は楽し」

苦しみあえぐ登りも、また、足も地につかぬほどふつとぼす下りの壮快さも、実にそれぞれに味のある楽しいものです。

そして、これはそのまま社会に出てからの私達のはげましの合言葉になっているのです。人生を一つの大きな山脈にたとえれば、苦しい失意の時も、楽しい満帆の時代も、それぞれの時期を、それぞれに味わい楽しむことが出来ること。その心構えを私は学生時代のあの幾度かの山旅で体得できたことを本当にうれしく幸せに思います。



皇居において受勲者記念撮影（昭和40年5月）

勲二等瑞宝章受章

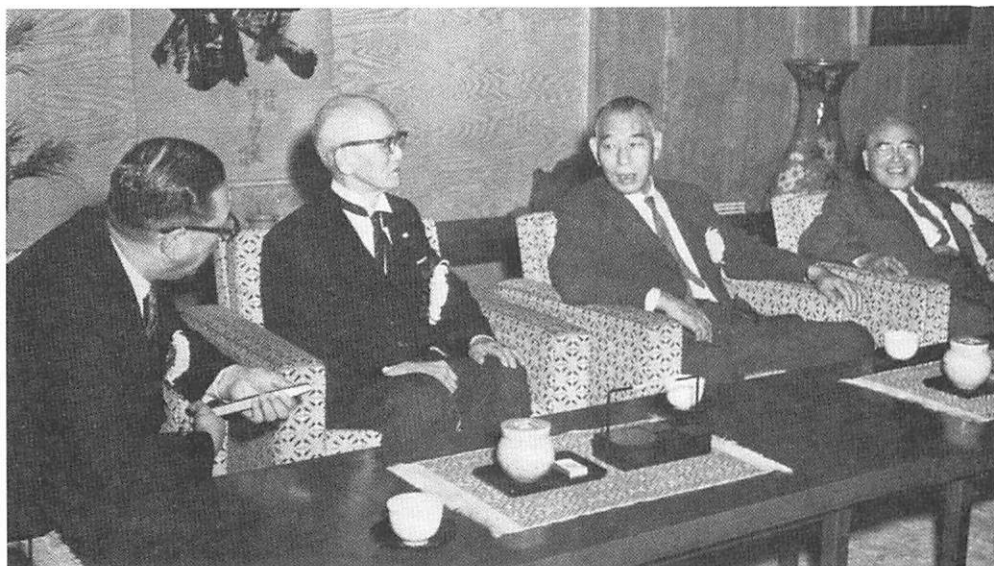
「勲章はみんなのもの」

先に実業教育の振興に貢献した功績により、藍綬褒章を下賜された村田謙造は、昭和四十年四月二十九日、春の叙勲に際し、勲三等瑞宝章の栄を賜った。この栄誉の報は、本人のみならず、学園関係者はもとより、私学の実業教育に身を挺する多くの人々にとって、永年の創立者の努力が公の場で認められたという深い感慨をもたらしたのである。

叙勲祝賀会は九月十五日、椿山荘において盛大に開かれた。挨拶に立った村田謙造は「八十になろうとする私の人生におきまして、今日ほど感激深く迎えた日はございません」として感謝の言葉を述べた。そして「この勲章は村田個人のものではありません。多くの在校生、教職員、そして多くの知友の方々、生徒を送って下さいました中学、高等学校の先生方、後援して下さる父兄のものであります」と強調した。

私学人最高の榮譽

当時の中村梅吉文部大臣は、多忙な時間をぬって臨席になり「勲三等と申しますと私立大学、私立学校の主宰者としては最高でございます。私立学校主宰者として最高の叙勲を受けられたということは、この一事をもつていかに社会的、国家的貢献が甚大であったかということとは申すまでもないと思うのであります」と力強い祝辞を



勲三等叙勲の祝賀会、椿山荘にて
左から遠山景光氏、村田謙造、中村梅吉氏、児玉九十氏（昭和40年9月）



述べられたのだった。
その後も村田謙造は昭和四十年十月十一日、東京都産業教育八十周年記念に当たり産業教育に対する功績顕著として東京都知事から表彰を受けたほか、東京都産業教育振興会会長から表彰を受け、さらに同年十一月には、産業教育振興中央会長表彰と、産業教育八十周年記念式典に際し、教育功労者として文部大臣表彰などを受けている。



叙勲祝賀会・パレスホテルにて



胸像の製作者北村西望氏と（昭和41年）

還暦を迎えた学園



内外の注目あつめ記念行事

六十周年で決意も新たに

昭和四十四年に村田学園は六十周年の還暦を迎えた。

記念式典は十月九日に共立講堂で挙行された。加藤行吉理事が六十年間の歩みを紹介した後、村田謙造は「六十一年目の新しい年から、これらの基盤の上に立ちまして、さらに次の時代の求めるものに向かって、本学園がより充実した教育を施す場となるよう努めてまいり覚悟であります。幸いに私は道を同じゅうする多くの教職員に恵まれ、天はまだまだ私に休むことなく働くことを命じているようであります。あとに続くものあることを信じて、今しばらくこの好きな道を歩んでまいり所存です」と、決意を新たにしました。

続いて永年勤続者三〇名が表彰され、籠宮昇が代表して表彰状を受け取り、謝辞を述べた。

坂田文部大臣直々の祝辞

来賓としては坂田道太文相、中村梅吉元文相、安井謙参議院副議長、美濃部亮吉東京都知事（代理）、愛知揆一全国経理学校協会会長、武見太郎日本医師会会長ほかそうそうたるメンバーの顔があった。

村田学園創立60周年記念式典



坂田道太文相は祝辞の中で次のように述べられ、学園のいやさかを祈念されたのだった。

二十一世紀に向かう教育のあり方は、その年齢、能力、特性に応じた教育が肝要で、特に私学のもつ特徴ある教育に着眼しなければならぬ。当村田学園において理事長さんがつとに明治四十二年以来、実業教育に力を入れてこられた校風はまことに尊いものである。今日の日本はこの学園を卒業した先輩の支えによって築かれていることを自覚し、特色ある実学の府として、誇りをもって、校長、教職員を中心に一致協力、この立派な村田学園を守りつづけ発展させてほしい。

永年勤続表彰者

籠宮 昇	和田 健治	耕沢 裕
高田 聡	今井市太郎	小暮 富蔵
小柳 雄亮	辻 克二	籠宮章二郎
佐々木健寿	中杉 修三	宮崎 芳憲
桑名 弘次	森 耕三	大竹 勇
高橋 文子	植野 作蔵	村田 照子
小澤 勇	坂下 愛子	肥田 美代
西口 敏光	松井 正二	古荘 元康
上野 藤吉	菊池 峻二	須永 静枝
斉藤 友作	金子隆四郎	吉田常太郎



創立60周年記念珠算大会
専修大学にて (昭和44年10月)

六十周年記念全国珠算大会

村田学園創立六十周年記念全国珠算競技大会は、十月五日、専修大学においてとり行われた。選手は遠く広島、大阪、京都、三重、富山からの参加者を含めて一八一団体、四八五名に達し、全国大会にふさわしい競技会になった。

全国珠算競技大会の優勝者は以下のとおり。

一般の部

団体総合競技	香里珠算教場
個人総合競技	雨宮 健三
応用計算競技	雨宮 健三

高校の部

読上暗算競技	雨宮 健三
読上算競技	佐藤 洋

団体総合競技 京都明徳商業高等学校

個人総合競技 鎌田 カヨ子

応用計算競技 笠原 芳男

読上暗算競技 高山 稔

読上算競技 神谷美砂子

中学の部

団体総合競技 板橋区立中台中学校

個人総合競技 森田 葉子

応用計算競技 加藤 頼子

読上暗算競技 森田 葉子

読上算競技 加藤 頼子

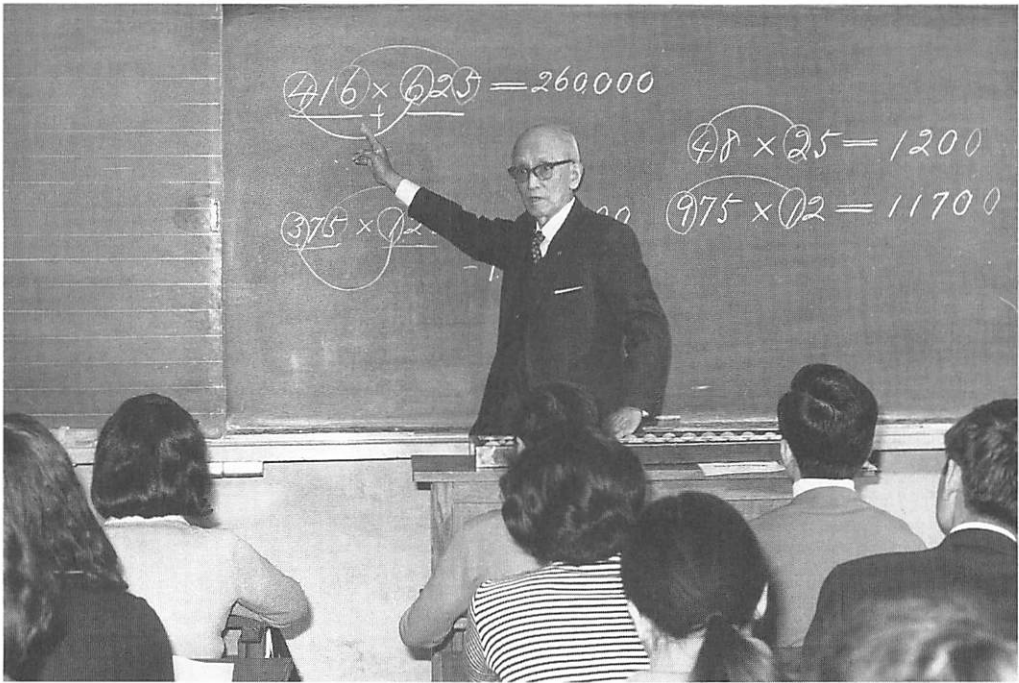
六十周年に華、村田女子商業高等学校の体育祭

この年、女子商業高等学校の体育祭は六十周年記念行事の一環として十月七日に千駄ヶ谷の東京体育館で盛大に行われた。

八十三歳の村田謙造はファミリゲームに出場、孫のような生徒たちに混じって一生懸命競技した。村田謙造の出場した三年チームは堂々の優勝、教職員・生徒から年を感じさせないファイトに限りない拍手が送られた。

磯崎国鉄総裁も村田のOB

晴れの六十周年だった昭和四十四年度はいつになく盛大な卒業式



村田謙造の授業風景（昭和45年1月）

によって締めくくられた。遠山景光千代田区長、永野重雄東京商工会議所会頭などそうそうたる来賓の中に異色の人が入っていた。国鉄の磯崎敬総裁だった。

私は国鉄の総裁ですが、国鉄総裁がこの席で祝辞を述べるということは大変場違いであり、何故来たのだらうとお考えでしょう。私はささやかな諸君の先輩です。私は昭和三十八年にいったん国鉄を辞めて浪人をしていました。その時はもうすでに五十歳を過ぎていましたが、どうしても簿記の勉強がしたいと思い、速成科に入っていました。まわりはみな私の息子や娘と同じ年頃の青年子女でした。私は「おじさん、おじさん」と呼ばれながら三か月間、非常に楽しく、そして出来もしないソロバンをはじき、随分先生にご迷惑をかけつつ、簿記の基礎だけはどうか分るまで教えていただきました。

磯崎総裁は村田時代の思い出を述べた後、当時の仕事に触れて簿記がいかに役立っているか強調し、「私は本当に村田簿記学校でわずかな期間でも勉強してよかったとしみじみ思います」と語っている。なお、村田簿記学校では早くから社員教育も実施しており、昭和三十年代の中ごろには東急グループの社員で構成した、通称「東急クラス」を設けて簿記を指導していた。東急の新入社員は五月から八月までの四か月間、村田簿記学校で簿記を勉強、以後第一線に配属されていた。現在でも都の予算を得て、警視庁の職員に対する教育も実施しているほか、企業の依頼を受け出張していくケースも数多い。

洗練される教育体系



願書受付のために並ぶ志願者たち（昭和40年代）

高学歴化の波

願書受付日に長蛇の列

昭和四十年代に日本は経済力をつけ、GNPがアメリカに次いで世界第二位となった。簿記の専門知識を修得した者に対する需要は高く、村田簿記学校の願書受付日には長蛇の列ができた。

昭和四十年代後半の入学案内によれば、村田簿記学校には本科（修業年限一年と二年）と速成科（同昼間部三か月、夜間部四か月）、専攻科（同昼夜間部とも二か月）が設けられていた。

本科には昼間部と夜間部があり、一年制コースの昼間部は、高卒あるいは同程度以上、夜間部は、中卒以上の学力がある者が対象。初歩から高度な知識・技能を修得させ、優秀な商業経理部門の実務家養成を目標とした。また、二年制コースは昼間部、夜間部とも高卒以上を対象とし、初歩から税理士、公認会計士試験合格程度の知識・技能を修得させ、企業の会計実務指導者の養成に努めた。

簿記以外のウェイトも増大

四十年代半ばごろから、高校進学率の上昇を受けて、高卒以上を対象とした二年制コースの生徒が増えてきた。このころの本科では

簿記、珠算のほかに経済学、英文簿記、英会話、タイプなどの科目が開講され、簿記・珠算以外のウェイトが徐々に高くなってくる。

速成科には簿記（商業・会社）と珠算（加減乗除・商業計算）の二課程、専攻科には上級課程（日商一級会計学科、同原価計算科、税理士財務諸表論科、同簿記論科、所得税法入門科、法人税法入門科など）と中級課程（会社社会計科、会計学科、原価計算科など）があった。

なお、昭和四十九年度の入学案内によれば、速成科の学費は入学料五、〇〇〇円、授業料一五、〇〇〇円、維持費一、五〇〇円、専攻科の学費は中級課程の昼間部一五、〇〇〇円、夜間部一二、〇〇〇円、上級課程の昼間部二〇、〇〇〇円、夜間部一六、〇〇〇円となっている。

当時、各種学校卒の銀行員の初任給は七三、〇〇〇円程度だった。

各種検定で好成績あげる村田生

村田簿記学校は伝統的に各種の検定試験や国家試験の受験指導に力を入れてきた。それが実力の証明書になるだけでなく、検定や国家試験を目指して努力するうち、忍耐力、持久力などが養われ、また達成感が生徒を飛躍させるバネになるからである。

簿記を学ぶ者にとつての関門である日本商工会議所の簿記検定について村田生の健闘ぶりを見てみると、たとえば、昭和四十六年度は東京地区で一級合格者五六五名中、村田生は一四二名、二五％を占めている。二級は合格者三、五一六名中一、〇九〇名（三一％）。同様に、四十八年度は一級合格者五一九名中一四一名（二七％）、二級合格者二、二五七名中八二九名（三七％）といった好成績をあげ

ている。

女子商業高等学校でコース制を導入

高学歴化は高等学校教育のあり方を変えた。普通科はもとより職業科においても一般教育への傾斜が強まり、伝統ある職業高校の数々が職業教育の看板を下ろす事態も到来した。こうした中であって、村田女子商業高等学校では女子商業教育の伝統を堅持しながら、いかにして生徒の多様な希望、高校の職業教育に対する社会の強いニーズにこたえていくかを研究し、昭和四十九年度から次のようなコース制を導入した。

A コース (Accounting Course)

商業科目が好きで、将来経理関係に携わりたい人のためのコース

B コース (Business Course)

経理関係に限らず幅広い分野で活躍したい人のためのコース

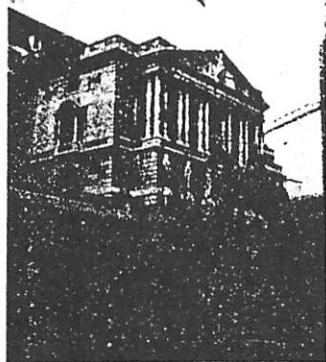
C コース (Culture Course)

普通科目を多く勉強したい人のためのコース。一般教養科目に重点を置く

これは一般にいわれる就職か進学かのコース分けではなく、どのコースに進んでも本人の適性・希望に応じて進路指導がなされる点に特色がある。

校長先生、欧州視察旅行

インランド銀行・ロンドン手形交換所など



イングランド銀行正面

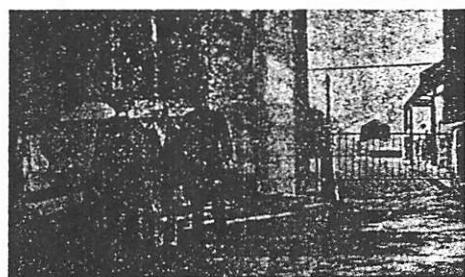
去(9)月16日(土)の午前、校長先生はロンドンに到着し、まずインランド銀行(インランド・バンク)を訪ねた。この銀行は、ロンドンに本店を置き、世界に支店を有する銀行で、その歴史は古く、1825年に設立された。校長先生は、この銀行の歴史と現状について、銀行の役員から説明を受けた。また、この銀行の業務内容についても詳しく説明を受けた。校長先生は、この銀行の歴史と現状について、銀行の役員から説明を受けた。また、この銀行の業務内容についても詳しく説明を受けた。

英経済の中枢を視る

ロンドンの中心地であるフィナンシャル・ディストリクトを視察した。この地区は、ロンドンの金融の中心地であり、多くの銀行と金融機関が集中している。校長先生は、この地区の景観と建築様式について、非常に感銘を受けた。また、この地区の金融の重要性についても詳しく説明を受けた。

JALDC8機にて

去(9)月16日(土)の午前、校長先生はロンドンに到着し、まずインランド銀行(インランド・バンク)を訪ねた。この銀行は、ロンドンに本店を置き、世界に支店を有する銀行で、その歴史は古く、1825年に設立された。校長先生は、この銀行の歴史と現状について、銀行の役員から説明を受けた。また、この銀行の業務内容についても詳しく説明を受けた。



ロンドン街にて (中央が校長先生)

ロンドンの中心地であるフィナンシャル・ディストリクトを視察した。この地区は、ロンドンの金融の中心地であり、多くの銀行と金融機関が集中している。校長先生は、この地区の景観と建築様式について、非常に感銘を受けた。また、この地区の金融の重要性についても詳しく説明を受けた。

村田女子商業高等学校新聞
「ひさかた」より



ヨーロッパ視察
ロンドンにて
(昭和48年9月)

悲願成就



地上10階地下1階建校舎竣工 神田神保町2-14(昭和49年4月)

創立六十五周年に新校舎落成

燦然と輝く簿記教育の殿堂

昭和四十九年は村田学園にとって大きな節目の年となった。この年は創立六十五周年にたあると同時に新校舎が落成、さらに、村田謙造が米寿を迎えるという三重の慶事がめぐってきたのである。

新校舎は地上一〇階、地下一階のデラックスなもので、昭和四十七年十月一日、仮校舎への移転修了後、十一月から古い五階建て校舎を取り壊し、年の瀬も押し迫った十二月二十一日に地鎮祭が行われた。工事は急ピッチで進み、四十九年四月一日にめでたく竣工した。

内部には事務室、食堂、図書室、講義室、講堂、保健室、英文タイプ室などのほか、急速に進む情報化に対応してコンピュータ室も配置されていた。

村田謙造はかねてから「自分の目の黒いうちに簿記会計の知識・技能を普及する殿堂を持ちたい」と語っていたが、新校舎はまさしく村田謙造の宿願そのまま「簿記教育の殿堂」と呼ぶにふさわしい威容でそびえ立っていた。



お祝い三重奏の日(米寿、新校舎落成、創立65周年)。パレスホテルにて(昭和49年5月)

記念式典と米寿を祝う会

創立六十五周年、新校舎落成式典および村田謙造の米寿を祝う会は四十九年五月、中村梅吉法務大臣、加藤清政衆議院議員、安井謙参議院議員、日野原重明聖路加看護大学長ほか多数の臨席を得て、パレスホテルにおいて挙行された。

村田謙造は米寿を迎えてなお矍鑠(かくしゃく)としていた。理事長の主治医である日野原聖路加看護大学長は祝辞の席上、日頃の健康管理に関連して次のようなことを述べている。

私は長い間、村田先生の健康管理をやってまいりましたが、先生は「健全な精神は健全な肉体に宿る」という古代からの諺をみごとに具現されています。

先生は七十七歳になりました時に、最後の人生のラウンドをできるだけ息長く有益に延ばしたいということを念願して、これまで一四回、聖路加病院の人間ドックに定期的に入られています。

精神と身体を健康に保つこと、それ以上に教育のゴールはないわけですが、そのゴールを先生は自ら陣頭に立って走られているわけです。

朝起きるとすぐ麴町から、この宮城の周辺を一時間散歩され、自彊術をやられて、からだを整えてから仕事をされます。私は先生の主治医として、先生が百を超えてもなお、矍鑠としてお仕事に従事され、教育という大切な事業を続けられることを、心から願うものであります。

巨星墜つ



学園葬 築地本願寺にて（昭和50年4月15日）

生涯現役を貫く

近づく天命

前年に創立六十五周年、新校舎落成式典をして創立者の米寿を祝う会とトリプルの慶びにめぐりあわせた村田謙造だが、体力の衰えも目立ち始めていた。

（旅行に）ご一緒することになった。次第に足が弱られてきたことである。座敷で席を立つ際に、思うように立てなくなることがしばしばとなった。同行する際は、常に横に一步下がってお供したが、万が一の場合はいつでも瞬時にお助けできるような気を配っていた。かといって先生は自称三八歳であるから、人から抱えられることを極度にきらう。あるとき先生がカメラの前で、直立不動で立っておられたが、先生の意志に関係なくただけトットと前方に自動的に踏みだしてしまい、回りでやつと抱えて止めたこともある。そのとき、最近足が弱られたなと痛感した。

村田簿記学校の理事で現校友会長の齋藤力夫氏の述懐である。

八十八年の生涯を教育に捧げて

昭和五十年二月十九日、村田謙造は風邪で身体の不調を訴え、同和病院に入院した。日頃から健康管理に人一倍気を付けている校長のことなので、教職員誰もが「また、大事をとっておられるのだな」くらいに受け止めていた。

しかし、二日後に村田謙造の容態は急変し、親族は不眠不休の看護体制に入る。二十四日、聖路加病院の日野原院長がアメリカから帰国され、深夜羽田から病院に直行。同和病院の院長と話し合い、再診した結果、即刻聖路加病院に移されることになった。

学校は重苦しい雰囲気にも包まれた。学校の行事はとどこおりなく進められていた。三月に入ると卒業式がある。関係者は「卒業証書の校長名を変えなければならぬまい」と覚悟していたが、校長は無双の生命力を発揮する。事実、主治医の日野原院長は後に「聖路加病院に入院された時にはすでに病氣は重く、極力手を尽くしてもあと二、三日ではないかと思われた」と述べている。

長年にわたって校長を診てきた主治医の適切な処置を得て、一時は回復の兆しさえみせ始めたがこれも束の間、数日を経ずして病篤しの報が入り、闘病が長引くにつれて校長は疲弊の色が濃くなっていた。

三月二十三日十二時十五分、親族が見守る中、村田謙造は静かに息を引き取った。死因は急性肺炎。かねがね「最期の一呼吸まで私は現役なんだ」と語ってきた村田謙造。いまわの際にあるいは、卒業式の夢を見ていたかも知れない。この年の卒業証書は二週間程前、自ら認定した、最後の卒業証書だった。

三月二十六日、卒業式が挙行された。村田照子副校長は、創立者の闘病の様子を伝え、「己に打ち勝とう、病に勝とうとするその強い努力の姿は、これから波瀾に富む人生に向かわれる皆さんへの何よりの無言の教訓だと思います」と、卒業生への手向けにしたのだった。

これまで村田謙造を支えて学園の経営にあたってきた村田照子は、創立者の遺志を引継ぎ、同年四月、村田学園の理事長・学校長に就任した。

創立者の御霊は永遠に

創立者との最後の別れ

二十四、二十五の両日、近親者による別れを済まされた遺体は、二十六日、自ら築き上げた簿記教育の殿堂、村田簿記学校に移され、学校関係者による通夜が営まれた。

翌二十七日が告別式。次々と弔辞が述べられる中、日野原聖路加病院長は――

「私が過去三十年間、内科臨床医として多くの不帰の旅につかれた方を看取りましたが、その中に最後まで、このような姿で歩まれた方は鈴木大拙先生と（村田謙造）先生のお二方であるということ率直に申し上げたいと思います」

と、立派な最期の様子を明らかにされた。

学校前に整列した在校生、卒業生、近隣の人々の前に霊柩車がついた時、嗚咽をもらさぬ者は誰一人としてなかった。

学園葬は四月十五日、築地本願寺においておごそかにとり行われた。引きも切らぬ会葬者の列は、故人の偉業を忍ばせて余りあった。

一周忌「学父を偲ぶ会」

村田謙造が不帰の客となり、遺族や学園関係者の悲しみも癒えぬうちに再び命日がめぐってきた。

故人はユーモラスで明るい性格の持ち主だったので、とかく沈みがちな一周忌法要は近親をもつてささやかにとり行われた。別に生前親交のあった方々には一席を設け、故人を偲び思い出話に一刻を過ごしていただく、との遺族の意を汲み、故人にゆかりの深いパレスホテルで「学父村田謙造先生を偲ぶ会」が持たれた。

偲ぶ会の開会に先立ち、故人の姿を再現する八ミリ映画が上映された。在りし日の元気な姿がスクリーンいっぱいに浮かび上がり、参会者は幽冥境を異にしていることをしばし忘れたのだった。

開会の言葉に続いて、主催者側を代表し神戸校友会長と村田照子理事長・校長が挨拶。この後、安井謙参議院議員の音頭で献盃し、酒肴を囲みながら故人の思い出話に花を咲かせた。来賓からは故人にまつわるエピソードなどが披露され、一同の感慨もまたひとしおだった。

△口掌

一枚の紙の裏表

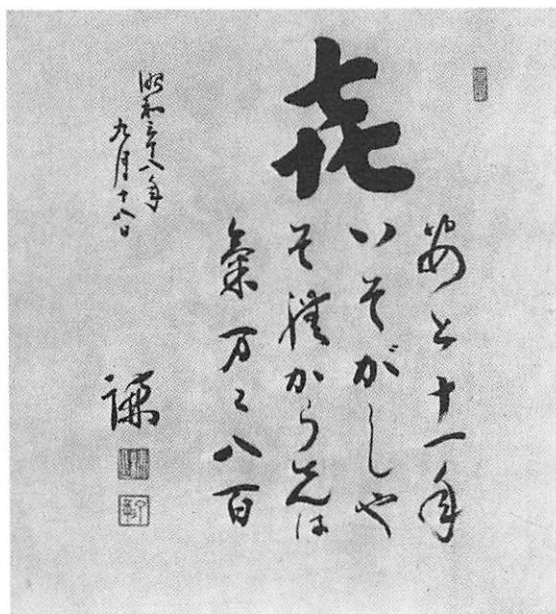
創立者村田謙造亡き後、理事長・校長に就任して学園の指揮をとる村田照子は追悼集『有算者勝』（昭和五十二年七月発行）のあとがきに「合掌」と題して次の一文を寄せている。

「光陰矢の如し」とか。月日のたつのが早いことを何気なくたえて使っていたこの言葉を、いま実感としてしみじみ味わわせていただいております。

三回忌を迎えるまでの二年間の、何と早く過ぎてしまったことか。父が最後の病床につきましたのが、ちょうど女子商業の入学試験日でしたから、昨年も今年も二月十八日のいそがしい一日が終わり、合格判定を下したあとのほっとした日々になりますと、あの聖路加病院に寝泊まりして学校に通った一か月のことが、昨日のように繰り返し思い出されてなりませんでした。

この二年間、病氣もせず何とか過ごしてこれましたことを、皆々様からはよく頑張ったとほめていただきましたけれど、私の実感はまだ雲の上を歩んでいるようです。（中略）

（追悼誌の）校正をしながら、一文一文を味わい深く読ませていただきました。そしてつくづく、父は何と果報者であったことかと思えます。自分の志を、貫き通すことが出来たこと。自分の好きな仕事を最後まで第一線でやり続けられたこと、自分



奇しくも、この色紙を書いた11年後に
創立者村田謙造は他界した



揮毫中の村田謙造

の手で念願の校舎も完成し、そこに一年間は通うことが出来たこと。天寿を終えるまで長いわづらいではなかったこと。如何に努力の人であったとしても、こんなにも自分の初志を貫徹できたなら、まれにみる果報者という言葉にふさわしいと思います。

私は、昭和二十五年以来、子供達の中ではただ一人、父のもとで仕事をさせてもらって来ました。若い頃は親子である感情と、師弟の関係の切り替えに、ずいぶん悩み、激突もし、一番はげしい批判者の一人にもなりました。

事業家としての峻厳な態度、教壇に立った時の無心なよろこびの姿、気が小さいかと思われような慎重さ、そうした変化をみせる父を、私なりに納得して、「一枚の紙の表と裏の関係」の悟りを開けたのは学園の五十周年記念行事が行われた三十四年頃からでした。

父は七十歳を過ぎて、それからは一年一年角がとれて来たようでした。昭和三十七年秋、軽井沢の別荘で軽い脳血栓を起こし、半身麻痺で二か月間の入院をしたのですが、このことはあまり周囲の方々に知られることなく、父の強い、生きることへの執念で完全になおすことができました。

お医者様が回診にみえる度に、「今すぐよくなる薬を、世界中に問い合わせ取り寄せて下さい」といつていたことを思い出します。病気に負けてたまるか、という気迫に圧倒されんばかりでしたが、この時は病魔は完敗して父の気迫勝ちとなったわけです。

それからの父は、前にも増して健康管理に真剣になりました。



「学父村田謙造先生を偲ぶ会」パレスホテルにて(昭和51年3月23日)

聖路加病院の人間ドックに毎年必ず入ること。雨天以外は早朝の散歩をすること。自彊術の体操を欠かさぬこと。食事は自分で身体に良いと思うもの以外は絶対に口にしないこと。そしてそれを亡くなるまで継続しました。

私が父から学ばねばならぬ第一のことは、この持続することへの意志の強さだと思います。七十年安保の騒しい時に迎えた学園の六十周年には父は八十三歳にもなっていました。それからの一日一日をおそらく毎朝めざめる度に、今日も生きていたという心で迎えていたのではないのでしょうか。

新校舎の建築という大事業も、父は生きることの張りとして、執念を燃やしていたようです。四十九年の春、父の米寿の祝、学園の六十五周年、新校舎落成という三拍子揃った祝賀の宴であんなにもおだやかなうれしい顔をしてくれました。でも私はひそかに父に天寿の終わりが近づきはじめていると思うようになったのもこの頃からでした。

おしやれで、十五世羽左衛門の声のめりはりを持っているとご自慢の父でしたから、皆様の前では、剣道できたえたキリッとした姿勢をしていましたが、机か何かのささえがないと身体がゆれて直立出来ない状態であったのです。

一か月の看病を子供達全員と孫も揃って聖路加病院に泊り込んで出来ましたことは、何かと父に心配をかけてきた私達にとっては、せめて最後の親孝行でした。

人の死に到るまでの、荘厳さ、静かさ、美しさというものを、私は自分の親によって教えられました。

父は最後の一呼吸が終わるまで、「自分はまだ死にはしない、生きるんだ」と思っていたことでしょう。息を引きとる数時間前まで、力強く握る手に、私達を見つめる目の輝きに、それを感じました。しかし、お医者様や、お見舞いにいらした方々へは、深い感謝の心で、口もとに笑みをつくり、「頑張ります」と

だけ言いつづけていました。

「人間は病氣と寿命は別ですよ」とは、父の口ぐせでしたから、自身のこと、病氣には絶対まけない、寿命なればいたし方なしとの悟りがあったのだと思います。

数年前から死装束を白絹で一式揃えてあり、棺に敷く布団まで白絹でそろえ、死出の旅路の杖、足袋草履まで全部ととのえて、最後の最後までおしやれであった面目躍如たる父でした。

病床につく四、五日前、たしか二月十三日頃だったと思います。久しぶりに父とゆっくり昼食をしたあと、父が「今日は気分がよい日だから気にしないで聞いてくれ。私が死んだら、葬式はどんな方法でするのか、照子の考えを聞かせてほしい」と言い出しました。私は「死んだあとのことまで気にするなんて苦勞性はやめにして、風邪をひかぬようにと考えた方がいいのに」と申しましたが、父がどうしても言えというのです。私はいたし方なく、思いつくままに私の考えを申しましたところ、満足したようで、「私もそうしてもらえたらと思っている」ということでした。

昭和五十年三月二十三日、父が逝ってから今日までのことはすべてその時の父と私の約束ごとでございます。

父の手文庫の中から古い奉書が出てきました。それは祖父の字で「明治二十三年三月二十二日、釈了彰、謙造」とありました。祖父は我が子謙造の仏名を三歳の幼児にすでにいただいていたようです。それも父が亡くなった一日前の三月二十二日の日付とは。

もう一つ嚴封してある封書がありました。中からは新聞にだ

す、父自身の死亡広告の原稿が出てきました。四十五年頃のスタンブが押してありましたから、父は心中密かに体力のおとろえを感じはじめた頃ではないかと思います。不肖の子供達であつたばかりに、父は何もかも自分で用意しておかねば心配であつたのかと、すまない気持ちで一ぱいです。

ただ一つ、父と約束はしませんでした。思いがけず先方からのお申し入れて、簿記学校の校舎をすぐ近くに新しく手に入ることでござまして、それもあの新校舎九階の校長室から、目の前に眺められるビルで、この三月二十三日の三回忌の当日、村田簿記学校二号館として、屋上の広告塔に火入式が行えたことを、心ばかりの父への手向けと思っています。

六十六年間、父が守り続けてきた城を、私も守り続けて参ります。更に次代の方が、ゆるぎなく受け継いでいただけるように守り続けて参ります。

ご厚情をいただいております皆様。自分の思い通りにやり抜いた父を、寛容の心でおつきあい下さいました方々ばかりだと思えます。ありがとうございます。

どうぞご縁の切れることなく、これからは父にかわって私をご叱責下さいまして、神保町の一角にとまりました「簿記会計に関する知識・技能は国民常識としてあまねく普及したい」との願いの灯火のあかかと輝き続けますよう、お守り下さいませ。

父の供養に、この追悼誌を発刊できますことを、重ねて感謝申し上げます、結びといたします。

合 掌